保育者に必要な協働する力の育成
― 協働学習「壁面制作」を通して ―

大塚 習平[a]　三上 慧[a]

[a]湘北短期大学保育学科

【抄録】

本稿では「協働学習」の具現化を図る目的で、授業「造形」におけるグループワーク「壁面構成」を課題として取り上げた。そこでは、グループ一人一人の「役割」をローテーションし、毎時間異なる体験を積み重ねて行く事で、最終的には「自立した個人」が育成される事をねらいとした。こうした実践を通し、「協働学習」の効果や課題について検証し、考察を加えた。

【キーワード】

協働学習　美術教育　幼児教育　構成

今から17年前の教育課程審議会答申では、「これからの学校教育のあり方」について「自ら考え、判断し行動できる資質や能力の育成」「自ら学び自ら考える教育」「学びや問題解決などの能力育成」「体験的な学習や問題解決的な学習への取組み」という指針が示された。現在の学校教育はこの指針に沿っている[1)]と考えられる。

こうした個人的･主体的な教育のあり方に加え、近年、コミュニケーションや協働体験による相互作用を補うため「協働学習」が重視されるようになった。この取組みでは、個人のみでは得られない複合的な成果が得られるとともに、「自立した個人の育成」をねらいとしている。

本稿では「協働学習」の具現化を図る目的で、「造形」の授業におけるグループワーク「壁面構成」を課題として取り上げている。そこでは、一人一人が必要とされる「役割」を担いながら協力し合い、その「役割」をローテーションする事によって毎時間異なる体験を積み重ね、最終的には全ての役割を担う事ができる「自立した個人」の育成を目指している。こうした実践を繰り返す中で、「協働学習」の効果や課題について検証し、考察を加えた。

＜連絡先＞

大塚 習平　otsuka@shohoku.ac.jp

1. はじめに

「造形」の授業では、平成17（2005）年からグループワーク「壁面構成」に取り組んできた。本課題を設定したきっかけは、ある実習生が実習先で「壁面制作」の課題に対応できず、実習中に相談してきた事にある。その時は、実習生にラフスケッチをFAXで送ってもらい、添削した上、壁面の制作方法についてアドバイスを加え、返信する事で凌

ぐ事ができた。この反省を踏まえ、授業「造形」で「壁面制作」を課題として設定した。その中で、制作する際に必要となる「画面の構成要素」（表1）「形と配置によるイメージ」（表2）「配色方法」「多様な素材」「多様な接着剤」「コラージュ制作」等の基本的学習内容を取り入れる事とした。

2. 課題「壁面構成」について

平成17年から平成25年までの授業「造形」では、1学年約120名の学生を対象とし、1クラス30名ほどで4クラス展開した。1クラス30名を、さらに6つのグループに分け、「春」「夏」「秋」「冬」「ルール・約束・しつけ」「行事」の6テーマから1つ選択できるようにした。

「壁面構成」一枚の画面の大きさは横90cm×縦80cmとし、軽量且つ丈夫なものにするため、厚さ1cmの発泡スチロール板に、ベクサーS[2)]を貼ったものを考案している。

造形教室は、材料や道具、スケッチブックなどを収容するための棚に囲まれている為、作品を展示するための壁がない。よって、「壁面構成」を制作しても掲示する事ができなかった。そこで、移動式掲示網（図1）を用意し、「壁面構成」を教室内に掲示できるようにした。この掲示網により、学生が教室内でお互いの作品を相互鑑賞し、学習し合える環境を整えている。

図1

「壁面構成」ではグループワークを通した学習形態を選択しているが、それは約120名の学生一人一人に一定の大きさの「壁面構成」を経験させる事が物理的に難しいからである。加えて、絵を描く事に対し不得意意識の強い学生や、コラージュの経験のない学生に、いきなり大きな面積の「壁面構成」を制作させる事は抵抗があると考えたからである。

次に、課題「壁面制作」の8つの行程について説明したい。

第一段階は、壁面構成のベースパネルの制作である。発泡スチロール板（90cm×80cm×1cm）に木工用ボンドを塗り、その上からベクサーSを貼る。これにより、容易に折れる事のない、しなやかで軽いベースパネルを作り出す事ができる。ボンドを塗る際は、皆で協力して手早くムラの無いように塗らないとすぐ乾いてしまい、使いやすいベースパネルができない。そこで、チームワークが問われる事になる。

第二段階、個人ワークとしてA4サイズの紙にアイデアスケッチ（図2）を描く。この時、アイデアが浮かばない学生がいる事も想定し、参考作品として先輩の作成した壁面作品（図3）、作品写真ファイル（図4）、保育雑誌を参照できるよう、教室に準備しておく。ここでは、保育雑誌に掲載されている図案を真似ても良い。

図2

図３

図４

第三段階、グループ内で個人のアイデアスケッチを見せ合いながら、1グループで1枚のアイデアスケッチを作成する。この時、できるだけ一人一人のアイデアを一つにまとめるように心がけるようにする。

第四段階、1枚にまとめたアイデアスケッチを基に背景色を決め、ベースパネルに着色する。その際、ローラーでの着色や、刷毛や筆による着色、色画用紙を貼ったり、素材を直接貼付けたりする方法がある。

第五段階、アイデアスケッチを基に、それぞれのパーツをどのような素材で制作するかについて、話し合いにより決めていく。

第六段階、グループ内で各自がパーツ制作を担当し、なるべくペースを合わせるよう、補い合いながら進めていく。

第七段階、パーツをベースパネルに配置し、構成を考えながら固定し、画面構成を完成させる。この時、大きさや形や配色について予想と異なった場合、パーツごとにやり直す事も可能である。

第八段階、壁面構成終了後、各グループで「タイトル」を考え、画面横に添付する。壁面構成は教員が写真撮影し、プリントアウトしたものを配布する。学生は配布された写真をスケッチブックに貼り、コメントを加えたもの（図5）を提出する。

図５

3.「協働学習」について

本年度（平成27年）の授業では、例年の取り組みを見直し、「協働学習」の視点からグループワークを強化し、学生たちの深い学びを促すことを目指した。授業に先立ち「協働学習の5つの基本的構成要素」と「役割分担」についてまとめたプリント（表3）ならびに「役割分担表」「係と仕事内容」について記したプリント（表4）を配布し、本授業における具体例を示しながら、グループワークが「協働学習」となるための五つの基本的構成要素[3)]を確認した。

① 積極的な相互依存関係

制作の初期段階において、個人単位で壁面の原画制作をする際に、同じテーマでもそこからイメージすることは各々が異なることに気づかされる。学生たちは、互いの異なる意見を尊重し合い、協力してあらためてグループで一つの原画を制作しなければならない。原画が決定してからも、パーツ制作におけるデザイン・素材の検討や、構成における配置・大きさの検討など、完成まで一貫して積極的な相互依存関係が求められる。毎回の目標設定と係分担・作業分担が、それを可能とする一助となる。すなわち、学生たちは毎回の授業において相互協力を必要とする目標をたて役割分担を行い、互恵的な相互協力関係を築く。これは五つの要素の中で最も重要とされているものである。

② 対面的で協力的な相互交渉

SNSが日常的なコミュニケーションのツールとなりつつある昨今であるが、壁面制作においては実際に学生同士が互いの顔と顔を突き合わせ、声を出してコミュケーション能力を高め支え合うことが求められる。各グループには二つのテーブルがあり、制作内容に応じて一つのテーブルに集合したり、二つに分かれたりして作業している。他の班員と意見が食い違う場面では、多少の困難が想定されても互いの意見の妥協点を見出すことや、そこから発展的によりよいものを考案することなど交渉術が効果的に磨かれていく。班員は毎回、後述する係の役割分担を意識しながら対面的・協力的なやりとりをする体験を積む。その経験は、保育現場において同僚・保護者・子どもとの関わり合いの中でも生きることになる。

③ グループ・個人の責任性

個人の役割と責任を明確にして全うする一方で、グループ全体としての責任性を意識させる。皆が一人のために、一人が皆のためにという精神を育てることになる。誰か一人の手が空いていたり、逆に誰か一人だけ頑張っていたりする状態が不自然であることを、共通に認識させることができる。造形が得意な者がリードしながらも、苦手な者も一緒に仕事をしてグループの成功のために力を合わせることで、よいものができることを体験する機会となる。また、最終的には壁面という作品が形に残るため、互いに関与し補い合うことを通して、個人では得られなかった大きな成果が感じられるだろう。一人でやることと集団でやることは内容が同じでも勝手が違うので、一人でできたことが皆でもできるとは限らない。社会文化的な協働学習を通して、最終的には班員一人一人が責任性・自律性のある個人として成長することが望まれる。

④ 生きる力となる社会的スキル

グループワークでは、話し合いや制作の過程で相手をよく知り信頼すること、正確なコミュニケーションを行うこと、互いに支え合い対立を建設的に解決することが必要となる。個人が積極的に周りに関与していく能力、問題解決能力が求められ、その育成は社会の中で生きる力につながる。実際、不明な点（道具の使い方や使用方法における助言等）を他のグループから教えてもらい解決するなど、グループ間の協働が生まれる場面も見られた。最終回の鑑賞発表会では、それぞれの班が五分ずつプレゼンテーションを行い、質疑応答がなされた。素材や技術的なことなどについて、活発に意見交換して気づきを高め合うクラスもあった。

⑤ グループの改善手続き

毎回各班に一枚ずつワークシート（表5）を配

布し、授業の始めに「本日の作業目標」、始めと途中に「作業内容」、最後に「振り返り」（反省点、改善点、次回の作業の見通し、質問、相談等）を記述させた。口頭の話し合いのみならずあえて書き出すことで、明確に意識させるようにした。振り返りは、グループの目標達成のために班員の貢献を明確化しより効果的にすること、省察を経て次回の目標につなげることを促す上で有効である。その内容を授業の終わりにリーダーが口頭発表し、グループ間でお互いの状況を理解できるようにした。

4.「協働学習」を通して

前述の基本的構成要素を念頭に置き、学生たちには下記の具体的な役割分担（六つの係と仕事内容）をさせた。一人一役で毎回ローテーションしながら全ての係を経験することで、他の班員の仕事ぶりも見て様々な役割の理解や自分に不足している力への認識を深められるようにした。さらに、いろいろな係を通して多面的に物事をとらえることを学び、将来的に「一人で全ての役割をこなせるようになること」を目指した。他者との役割分担に基づく協働学習を経て個人の学習のあり方も見直し、省察的な学びができるようになることを期待したい。なお、係のネーミングについては、担当教員2名（大塚、三上）で保育者として現場で必要な力を念頭に検討した。保育者は目の前の仕事に誠実に向き合いながらも常に周りを見て行動する必要があるため、同僚・子ども・保護者・地域との協働も視野に入れ、下記の六つの係を設定した。各グループの班員数は6～8名と差があるが、記録係と技術係は、班員数に応じて1～2名で担当できるように配慮し対応した。

●リーダー

グループのまとめ役。全体を見て班員の意見をよく聞いた上で、言葉掛けをして仕事を促す。グループがうまく協働できているかを見守る。始めに役割分担表を記入しながら、本日の役割分担を班内で発表する。ワークシートに記入する内容を話合う際の司会、タイムキーパーに加え、後片付けを促す立場にある。日頃リーダー的存在は固定化されがちだが、一人一人が担当することで、保育士として必要となるリーダー性を養うことを期待した。

●応用係

制作の方法について、これまでの課題（前期の授業、湘北祭等）で学習した素材・技法と関連づけて提案する。「造形」前期の課題は、様々な素材・技法を学ぶものであり、直接的に生かせるものが多数あるので、復習も兼ねて前期の課題の定着を期待した。

●質問係

制作において班員から出た疑問の声に耳を傾け、班内で質問内容と解決案を共有し教員や他のグループに質問・相談する際の窓口になる。

●記録係（1～2名）

○ワークシート担当

グループの話し合いをもとに、ワークシートに記入する。振り返りの際は、話し合いの時間がない場合は各係に聞き取りメモする。

○撮影担当

制作過程に応じて携帯等で撮影し（毎回1枚程度）、大学のパソコンからYドライブに送る（最終回には最大10枚までにしぼる）。

●技術係（1～2名）

○材料担当

子どもたちへの表現として、最適な素材と材質を積極的に提案する。

○技術担当

材料や道具の扱いの技術的なことを積極的に提案する。一年間造形室に展示するため、少なくてもその間は破損することなく展示に耐えられるように工夫する。

●構成係

壁面の画面全体の構成・デザインに関して、よりよい作品にするために積極的に提案する。パーツの大きさや配置などは、画面全体のバランス（他のパーツとの兼ね合い、離れて見たときの印象、配色の効果）を意識して決める。配布資料の「画面の構成要素」（表1）、「形と配置によるイメージ」（表2）を参考にする。

5.「協働学習」の効果について

協働学習のねらいを説明した上で、役割分担を明確にし、それをローテーションする事によって、一度経験した係について、次に担当となった人に教えたり、アドバイスし合ったりするようになった。これをきっかけにして、各自が以前よりもより主体的に取り組もうとする意識が強くなり、様々な問題点についても忌憚なく言い合える雰囲気ができた。何でも話し合える雰囲気が出来上がると、具体的に以下のような場面が発生した。①画用紙の切り抜き方について、お互いに注意し合う事で、一人一人が無駄無く切り抜くようになってきた。②机の上が材料や道具で煩雑になっていた場合、整理・整頓するよう、お互いに注意し合ったり、気付いた人が率先して片付けたりするようになった。③使い切った絵の具や糊等のチューブ、マーカー等の始末ができるようになった。④原画からトレーシングペーパーでトレースする際、柔らかい鉛筆（B、2B、4B）を使用する意味が、お互いの話し合いによって理解できるようになった。⑤発泡スチロールで表現する時は、画面の奥行きを考えながら効果的に使用しなければならない事が話合われるようになった。⑥広い面積の接着は授業時間の最後に行い、重りを載せ、半日から一日乾燥させるようになった。⑦グラデーション等大きな画面に描く場合、まずは小さな画用紙で試しながら段階的に進めて行くようになった。⑦回を重ねる事により、段取りを考えながら効率よく進めて行けるようになった。

「リーダー」がタイムキーパーを担うようになり「授業終了まであと○分です」「そろそろ片付けに入りましょう」「掃除をしましょう」という声がけをするようになり、授業時間内で終了できるようになった。

「質問係」の配置により、疑問や質問についてグループ内で一度確認し合うようになった。これにより、何でもすぐ教員に聞けば良いというかたちから、学生同士で解決できる場面が多く見られるようになった。例えば「○色の画用紙はありますか？」「スチロールには絵の具で着色できますか？」「紙とスチロールはどの接着剤を使えば良いですか？」等の単純な質問が少なくなった。また、教員に対し、同じ質問が人を変えて何度も寄せられる事も無くなった。そして、班内で解決できない問題が発生した場合でも、すぐに教員を頼るのではなく、他の班ではどうしているのかお互いに見て学ぶようになった。例えばスチロールカッターの使い方について、先行している班の学生に使い方を聞いたり、逆に教えたりする場面が見られた。

「道具係」の配置により、ヒートカッターなど限られた数の道具を使う際「○時まで使います」な

ど声を掛けたりして、譲り合うようになった事、道具の使い方が丁寧になった事、使用していない時は速やかに元の場所へ返却するようになった。

「記録係」がモバイルで作業進行状況についての写真を撮り、学内パソコンに設けられたファイルに入れる事により、クラスや学年を超えた学生が情報を共有し、学び合える状況をつくり出した。

壁面制作完成が山の頂上だとすれば、山の頂上にたどり着く為には、登山隊が様々なコースを設定して登頂する事と共通しており、各班のリーダーの個性および構成メンバーの考え方によって、方向性を決定できるようになった。①原画制作について実寸大の紙（90×80cm）に描き、それをトレースしてパーツごとに分担する方法と、最初からパーツの原画制作を行い、それを配置しながら進めて行く方法が見受けられた。②原画から発泡スチロールへのトレース方法として、カーボン紙を使用する班もあれば原画を切り抜いたものを型紙として利用する班もあった。

6.「協働学習」の課題

- 壁面がどうしても立体的になってしまい、教員から見て少なくとも一年間は壊れないような強さを維持できないものもあった。教員側から見てこうした方が良いと思われる点と、学生が主体的に進めている点との調整が難しい。
- 一人で課題に取り組む場合と異なり、話し合いが横道に逸れたり、盛り上がりすぎて慌ただしい雰囲気になったりした。逆に、なかなか話し合う事ができずに、黙ったまま時間を過ごしてしまう班もあり、特に開始時点での差が大きく、それが最後まで尾を引いた班もあった。
- 一人一人が役割分担を意識するためにも、ワークシートに記録係以外の仕事の跡が見えた方がよいのではないか、という教員間の反省を基に、第五回からは各係の自己評価（班への具体的貢献内容）を振り返り記載するよう促した。しかし最終回になってもまだ係の仕事内容が浸透していない班もあった。複雑で分かりづらいのが原因かもしれない。役割分担の係名・内容について（特にリーダー・記録係以外の係について）、適切かどうか吟味する必要がある。
- 第一回目に全九回の目標（作業の見通しとして仮の計画）をたてさせた方がよいかもしれない（全体の時間を考慮した上で、毎回の目標を設定するため）。ただし、初回は制作ペースの予測が難しいので、二回目以降に計画を修正することを前提に、仮のものをたてると良いのではないか。
- 全九回の授業で教室（131,132）の交換が平等になるように調整することを配慮した方が良い。今回は同じ教員が継続して指導することを優先して七回目から教室交換だったが、もし来年度も全九回であれば、五回目から交換とするのはどうか。（最終回は合同なので四回ずつ各教室を使用することになる。）
- 制作過程の記録が途切れてしまったグループがあった。忘れないようにするための方法について工夫する必要がある。

7. 考察

学生主体により制作してきた結果、例年と比較して、より立体的な作品が増えたように感じる（図6～図23）。学生が主体的に活動する事により、教員は全体の活動を俯瞰できるようになったが、制作の目的、作品の構築性、安全の確保、作品の保管について、いかにして気付かせ、必要であれば軌道修正する事が教員の役割となる。

今回、「質問係」の設定により、グループ内で学生同士確認し合う事が促進された。これにより、

教員に対して質問に来る学生の数が激減（少なくとも1/3程度）した。学生から回収した「振り返りシート」によれば、学生が学生に対し質問したりする事が、教員側で考えるよりも遥かに困難である事が、改めて認識できた。また、この結果とは逆に、授業においてグループの枠を超えて教え合う場面も多く見られた。この事に関しては、グループ構成も左右していたようだ。つまり、今回のグループ編成は、入学時より一緒にいる班[4]のメンバーが、教室内に三分の一ずつ分かれてグルーピングされていた事による。よって、こちらの予想以上に、グループの枠を感じさせないコミュニケーションが成り立っていたと考えられる。

役割分担をローテーションする事で、学生たちの授業への参加意識が高まったように感じられた。一度経験した内容を未経験者に教えられる事や、未経験者が経験者に聞く事ができるという互助作用が、コミュニケーションを円滑にする要因となったと考えられる。また授業の中で毎回、目標と振り返りをワークシートに記録することで、制作過程や段取りが、より記憶に残りやすいものとなった。これにより、次時の作業に入りやすくなり、段取りも良くなっている事が確認できた。

学生は自分自身が作る事と並行して、教員としてやらなければならない事についても意識できるようになった。将来、保育する子どもたちに共同作業を指導する際にも、今回グループワークに大切なことについて、身をもって体験し感じられたことが生かされるだろう。

協働する上で大切なことに学生自身が気付くためには、ある程度時間をかけて協働学習に慣れることも必要なため、全九回という長い日程で実施できたことは良かった。

8. さいごに

「実習で困る事の無いように」というシンプルな思いから始めた課題「壁面構成」であるが、こちらが予想した以上に学生が習得できる造形的内容を多く含んだ課題であった為、改良を加えながら、何年も取り組んできた。

今回、三上講師の提案により「協働学習」を取り入れながら、授業内容を大きく改良した事により、より包括的な教育目標を含んだ課題として「壁面構成」を実現する事ができたと思う。今回のグループワークを通して、メンバー全員に主体的な取組みが生じた事に、この場を借りて御礼申し上げたい。また、授業やアンケート調査を通して新たな課題を発見するに至った。次年度からの授業において、本課題に更に磨きをかけていきたいと考えている。

註

1) 美術教育学者の宮坂元裕氏は『「造形教育」という考え方』の中で「現在の学校教育は一九九八年教育課程審議会答申の次の部分に集約されている」としている。
   ① 自ら考え判断し行動できる資質や能力の育成を重視する。
   ② 知識を一方的に教え込むことになりがちであった教育から自ら学び自ら考える教育へと、その基調の転換を図る。
   ③ 学びや問題解決などの能力の育成を重視する。
   ④ 実生活との関連を図った体験的な学習や問題解決的な学習にじっくりとゆとりを持って取り組む。
   宮坂元裕『「造形教育」という考え方』
   平成18年2月10日
   発行 日本文教出版　出版 三晃出版
2) ベクサーSは美術出版社カタログに掲載されている1m10cm × 30mのロール紙。和紙のような漉き紙の一種で非常に軽く、耐久性と耐水性

に優れており、着色も可能である。本課題では、発泡スチロール板（90cm × 80cm × 1cm）にベクサーを包み込むようにして接着させて活用している。こうする事により、割れにくくしなやかな壁面ベースパネルを作り事ができる。

3) ジョンソン,D.W.、ジョンソン,R.T.、ホルベック,E.J. 訳：石田裕久、梅原巳代子『学習の輪―学びあいの協同教育入門』（第５章、二瓶社、2010）を参考にし、壁面構成における解釈を施し授業で実践した。

4) 本学保育学科では、大学生活において、より細やかな学生への対応を実現する為、班別指導体制をとっており、約 120 名の学生を 12 班に分け、各班１名の専任教員が担当するようにしている。この体制を足がかりとして、学生は同学年のみならず、学年を超えて容易にコミュニケーションをとる事ができるようになる。

図６

図７

図８

図９

図 10

図 11

図 12

図 13

図 14

図 15

図 16

図 17

図 18

図 19

図 20

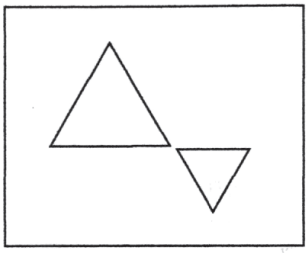
図 21

図 22

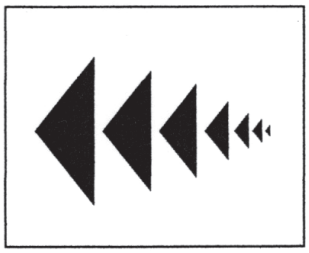
図 23

表 1

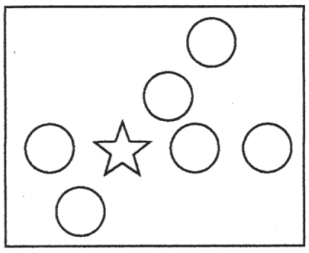
画面の構成要素



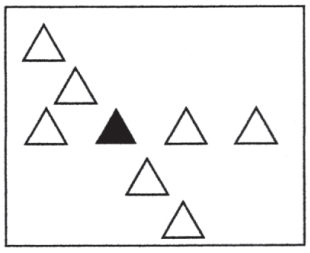
コントラスト



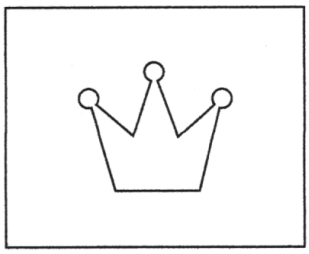
グラデーション



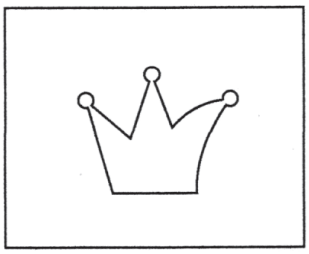
アクセント



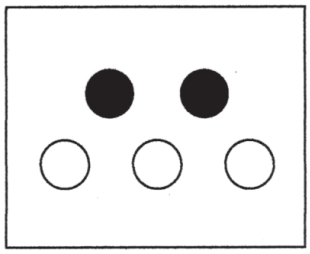
アクセント（色）



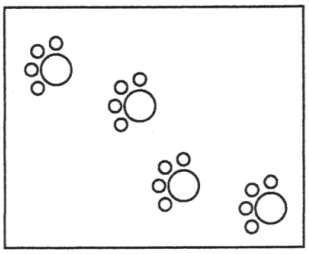
シンメトリー



アシンメトリー



バランス



リピテーション

表２

形と配置によるイメージ

構成的要素として、形と配置によってもいろいろなイメージを喚起させてくれる。

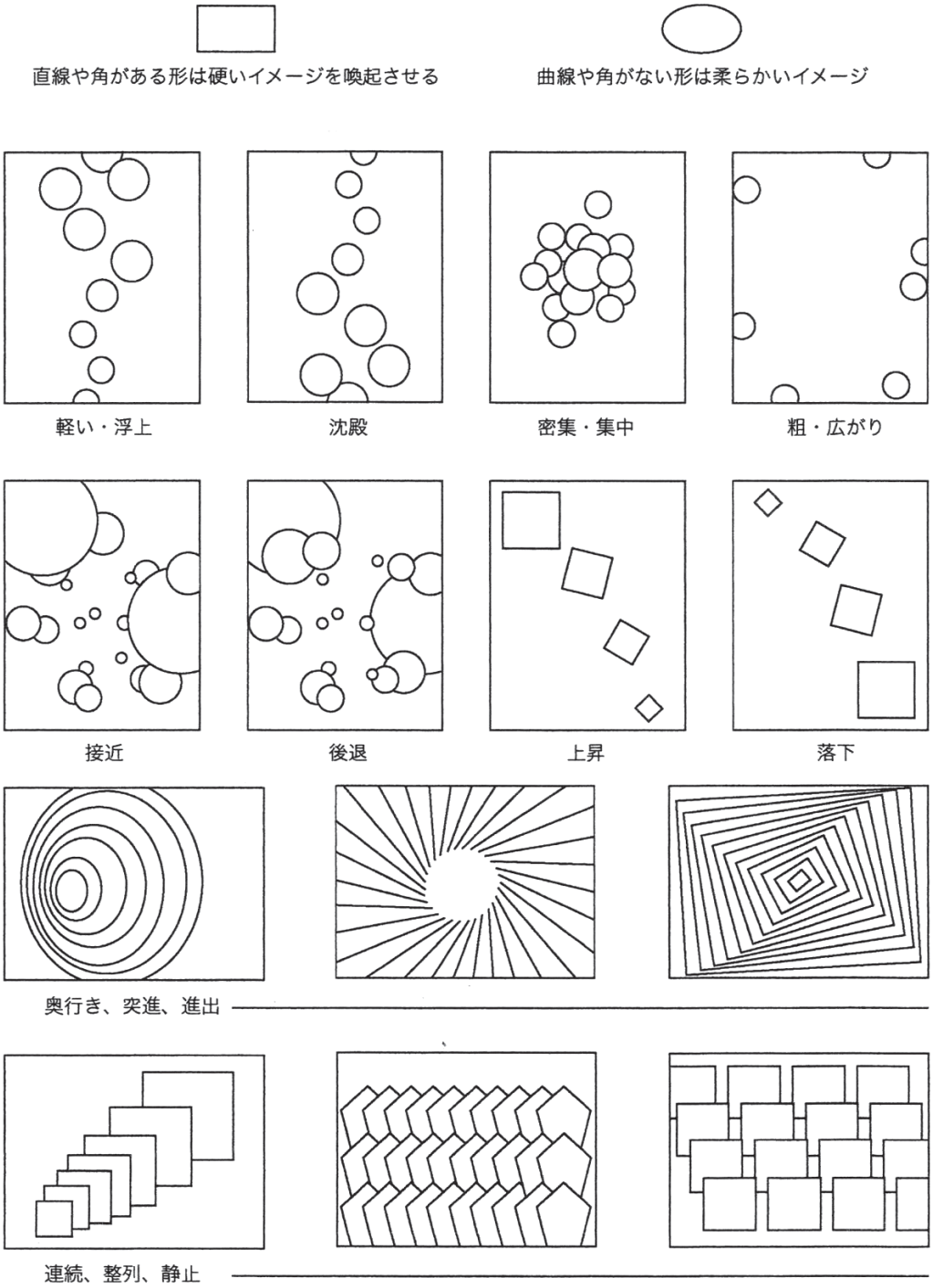


表３

造形「壁面構成」2015

協働学習の5つの基本的構成要素

①積極的な相互依存関係

相互協力を必要とする目標をたて、役割分担し、互恵的な相互協力関係を築く。

②対面的で協力的な相互交渉

学生同士が互いの顔と顔を突き合わせ支え合うことが求められ、役割分担をして対面的・協力的なやりとりをする。

③グループの責任性

個人の役割責任を明確にし、最終的にメンバー一人一人が自立した強い個人として成長するために、グループ全体としての責任性を意識させる。

④社会的スキルの適切な利用

グループワークの中で、相手をよく知り信頼し、正確なコミュニケーションを行い、互いに支え合い、対立を建設的に解決することを通して、社会の中で生きる力につなげる。

⑤グループの改善手続き

グループの目標達成のためにメンバーの貢献を明確化しより効果的にするため、毎回の授業の最後には省察を経て次回の目標につなげる。

役割分担（係と仕事内容）

●**リーダー**：グループのまとめ役。言葉掛けをしてメンバーに仕事を促す。グループがうまく協働できているかを見守る。役割分担表を記入する。

●**応用係**：制作の方法について、これまでの課題（前期の授業、湘北祭など）で学習した素材・技法と関連づけて提案する。

●**質問係**：教師や他のグループに質問・相談する際の窓口になる。

●**記録係**（1～2 名）：

ワークシート担当：グループの話し合いをもとに、ワークシートに記入する。

撮影担当：制作過程に応じて携帯等で撮影し（毎回 1 枚程度）、最終回には Y ドライブに送る（最大 10 枚まで）。

●**技術係**（1～2 名）：

材料担当：最適な素材と材質を積極的に検討する。

技術担当：材料や道具の扱いの技術的なことを積極的に検討する。

●**構成係**：壁面の画面全体の構成・デザインに関することを積極的に検討する。

表４

造形「壁面構成」 2015

クラス・班＿＿＿＿＿＿＿＿

グループのテーマ・タイトル＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

役割分担表　※毎回ローテーションし、全員が全ての係を経験すること。

メンバー氏名	①10/21	②10/28	③11/4	④11/11	⑤11/18	⑥11/25	⑦12/2	⑧12/9	⑨12/16
	●テーマ決定								
	●ボード制作								
	●個人で原画制作								

係と仕事内容

●リーダー…グループのまとめ役。言葉掛けをしてメンバーに仕事を促す。グループがうまく協働できているかを見守る。役割分担表を記入する。

●応用係…制作の方法について、これまでの課題（前期の授業、湘北祭など）で学習した素材・技法と関連づけて提案する。

●質問係…教師や他のグループに質問・相談する際の窓口になる。

●記録係（1～2 名）…

ワークシート担当：グループの話し合いをもとに、ワークシートに記入する。

撮影担当：制作過程に応じて携帯等で撮影し（毎回 1 枚程度）、最終回には Y ドライブに送る（最大 10 枚まで）。

●技術係（1～2 名）…材料担当：最適な素材と材質を積極的に検討する。

技術担当：材料や道具の扱いの技術的なことを積極的に検討する。

●構成係…壁面の画面全体の構成・デザインに関することを積極的に検討する。

表5

造形「壁面構成」　　2015年　月　日(水)

クラス・班

テーマ・タイトル　　記録係

本日の作業目標

■作業内容

■振り返り

■自由記述欄(質問などもOKです)

おつかれさまでした！

Upbringing the cooperative power necessary to an infant teacher
- Through cooperative learning “Wall Painting Composition” -

Shuhei OTSUKA　Kei MIKAMI

【abstract】

In this paper, Otsuka and Mikami carried out cooperative learning in a lesson “zoukei”. We exchanged the role every class and had students have different experiences. The purpose is to help individual students to be independent. We have examined and considered the effect of cooperative learning and its problems through such practice.

【key words】

Cooperative learning, Education through arts, Child education, Composition